

2017MHC 登山講習

春・夏山の登山講習報告書

# アルプス登攀記

2017MHC 登山講習「白馬大雪渓を登る」から 撮影 鈴木雅則

**主催 NPO 法人 松本ヒマラヤ友好会<MHC>**

本部事務所 松本市島立 4539-7 TEL 47-6197 FAX 47-5685

E-mail : mhc@lily.ocn.ne.jp ホームページ : <http://www1.ocn.ne.jp/~mhfc/>

**共催 松本市 山岳観光課 TEL94-2307**

**後援 長野県教育委員会 松本市教育委員会**

信濃毎日新聞社 朝日新聞松本支局 毎日新聞松本支局 読売新聞松本支局 産経新聞長野支局  
中日新聞社 市民タイムス 松本平タウン情報 長野日報社 SBC 信越放送 NBS 長野放送  
TSB テレビ信州 abn 長野朝日放送 テレビ松本ケーブルビジョン FM長野 長野県写真連盟



クルマユリ

6月11日 AM8:00、上高地アルペンホテルに6名全員が集合し、内田良平さんを講師に写真教室の講習が始まった。講師の挨拶と撮影要領の説明の後、AM8:45、カメラ機材を担って、梓川右岸の土手から河原に降り、焼岳を撮影。河童橋を渡り、左岸沿いに小梨平方面へ向う。上空は快晴。雪解け水を集めて流れる梓川、その川岸のケショウヤナギは、萌えるような新緑に染まっている。参加者は、内田さんから適切な撮影指導を受け、三脚を立てては、撮影のシャッターを切る。



梓川右岸の撮影風景



河原から焼岳を展望



新緑に覆われる6百山

小梨平では、食堂に入り、熱いコーヒーをすすりながら一息つく。しばらくで小梨平から引き返し、新緑の上高地を後に、乗鞍鈴蘭から定期バスで乗鞍岳中腹へ向かう。次第に天候が下り坂となり、高原では氷雨が降り出した。

PM12:30 今日の宿、乗鞍岳中腹 2350mに建つ「位ヶ原山荘」に到着。ここで食堂を借り、昼食を摂る。窓の外は、本格的な冷たい雨が降り出した。今日は炬燵にもぐり、沈殿と諦めた。



河童橋での参加者



ズミの花と六百山



萌えるケショウヤナギと穂高岳

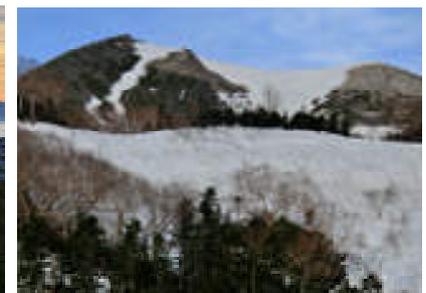
夕食は、シカ肉鍋の御馳走。その後、山荘の一室を借り、パソコンとプロジェクターを使用し、今日撮影した参加者の作品を白壁に映し出し、内田良平さんから、気さくで丁寧な講評を受ける。PM9:00 過ぎまで山岳撮影談義が行われた。参加者は写真撮影のヒントを得たようだった。



位ヶ原山荘

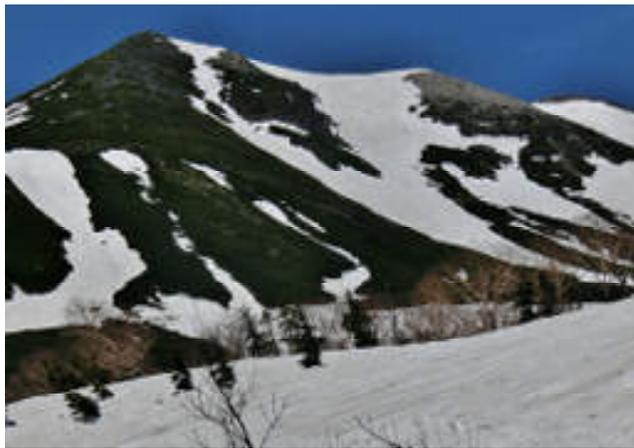


乗鞍の朝



位ヶ原からの乗鞍岳

6月11日夜半の雨に悩まされながら、AM5:30 起床、東の空をを橙色に染めながら晴れの朝を迎える。朝食後は、肩の小屋口バス停まで始発バスに乗り、そこから道路を歩いて降りながら、山々を撮影して位ヶ原へ帰還する事にする。



残雪頂く乗鞍岳



写真撮影風景



肩ノ小屋口から下山路で撮影した、残雪頂く槍・穂高岳の峰々

PM11:30、位ヶ原へ帰還、そこで昼食後、PM1:30の下りのバスに乗り込み乗鞍鈴蘭へ向かう。PM2:30乗鞍鈴蘭から、参加者全員駐車していた車に同乗し、松本へ向かい、県松本合同庁舎駐車場で解散。PM4:00前松本駅に内田さんを見送り、最終解散とした。

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則

5月20日 AM8:00、松本に参加者3名が集合1台の車に同乗し、出発する。天候は快晴。新緑萌える梓川沿い国道158号線を走る。

新釜トンネルを抜けると、展望が開け、左に残雪の焼岳、そして道を大きく右に曲がると、青空高く、残雪の穂高岳連峰が望まれる。上高地に到着。出発準備をする青葉若葉の空に、ウグイスのさえずる声が鳴り響いている。



河童橋から残雪の穂高を仰ぐ



梓川右岸に行く



六百山と梓の清流

AM9:00 準備を整え、リュックを背負い、出発する。雪解け水を集めて飛沫を挙げて流れる梓川、その流れに架かる河童橋から残雪の穂高を仰ぐ。ここから右岸沿いに木道を歩き、明神へ向かう。支流に泳ぐイワナを見つけては歓声を挙げる。1時間30分ほどで明神に到着。嘉門次小屋の囲炉裏端に陣取り。岩魚の塩焼きに舌つつみを打つ。



シロバナエンレイソウ



木の若葉を食べる野猿



ニリンソウの群落

20分程の休憩の後、明神橋を渡り梓川岸辺に日陰を探して、昼食を摂る。昼食後は梓川左岸の林道を徳沢に向うこととする。この付近からはニリンソウ、シロバナエンレイソウが一面に咲き、心臓破りの坂の道端にはサンカヨウ、ツバメオモトなど白い花々が咲く。梓川岸辺の近くの林道を抜け前穂高岳の先鋒が望むと、PM2:00 ハルニレの新緑に覆われた徳沢に到着する。



ツバメオモト



徳沢のテントサイト



フッキソウ

新装なる徳沢ロッヂで宿泊手続きして荷を置き、煎じてくれた熱いコーヒーを啜り、今日の疲れを癒す。見上げる残雪の峰々と香るような新緑のみずみずしさ、そして咲き競う花々に、心洗われる気持ちとなる。



カタバミ



ニリンソウ咲く林道を行く



徳沢ロッヂでコーヒーを頂く

21日、鳥のさえずりの朝を迎える。朝食後、AM8:00、準備を整え、軽荷でロッヂを出発。梓川左岸をさらに奥に進む。20分程で新村橋に到着。揺れる橋を渡り、奥又白登山口へ向かう。ダケ樺林の枝越しに、前穂高岳東壁の大障壁が近づいてくる。小説「氷壁」の舞台となったところだ。その反対側を振り返ると、蝶ヶ岳の稜線が間近に迫ってくる。登山の歴史となった舞台に立ち、感慨もひとしおだ。



徳沢梓川畔から望む、朝陽に映える、前穂高岳、明神岳

この後、同じ道を引き返し花々の咲く左岸の林道を歩き、明神、小梨平を経由、小梨平の食堂で昼食を摂り、しばらくで上高地に到着、PM 2:30 松本で最終解散としました。

「青い空と上高地の新緑と穂高岳の残雪、そして花々の多さを再認識した、大満足の山旅だった。」

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則

## 2017MHC 登山講習 金峰山と瑞牆山登山 報告

6月17日(土)AM6:00、6名が車に乗り合わせて松本を出発。曇天模様の天気。須玉インターで中央高速道路を降り、小一時間山道を走ると、AM7:45 瑞牆山荘登山口に到着する。準備を整え AM8:00 出発。森林帯を抜け、登り1時間で富士見平小屋、さらに1時間で大日小屋テント場を抜けると、満開のシャクナゲ林に出会う。



富士見平小屋



シャクナゲ林の中を行く



満開のシャクナゲ

登り30分で50mの岩峰大日岩脇を過ぎて、さらに急登路を登り続け、途中林の中で昼食を摂る。中休止後、岩石帯を30分程登り詰め、砂払ノ頭と呼ばれる岩稜線に登り出ると、展望が開け岩稜の高みに、山頂を望む。



岩石の急坂を登る



砂払いの頭から山頂を望む

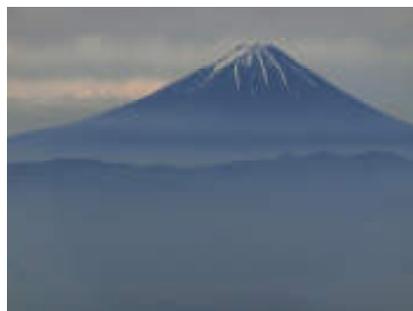


金峰山の頂に全員登頂

息を切らし、疲れた足取りで岩石群の悪路を登り詰めて行くと、PM2:10 標高2599mの金峰山の頂に全員登頂する、「バンザイ!」。しかし山頂からは、霧雲が覆い遠望が効かない。15分ほど休憩後、頂上の北側直下に建つ金峰山小屋に下る。PM3:00 全員到着、泊す。小屋は登山者で大混雑だ。明日の好天を祈って、AM8:00 就寝する。



朝の金峰山下山路からの瑞牆山

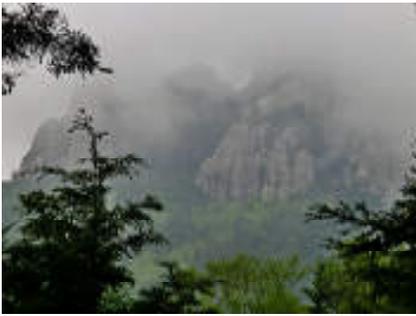


尾根路から望む富士山



下山路の大岩を下降

6月18日(日)AM4:30 起床。天候は晴、夜明けを迎え、東上空一面が朝焼けに輝いている。朝食後、準備を整え、AM6:40 出発する。日本列島西に寒気団が居座っているせいか、吹く風が冷たい。岩稜線を慎重に下降し、シャクナゲ林を抜けて、AM9:15 富士見平小屋へ到着する。中休止後、態勢を整え直し AM10:00 瑞牆山を目指して、いざ出発する。歩き出すと木々の間から、瑞牆山の大岩峰が木々の間からそそり立って見える。森林帯の中、一旦下降し、一休みの後、沢筋の悪路をひたすら登る。



木々の間から瑞牆山大障壁を望む



シャクナゲの赤いつぼみ



瑞牆山への悪路を登る

シャクナゲ林が谷間を覆う暗い急登路、倒木を越え、大きな岩の間を抜け、一步、一步這いつくばるように急坂を登る。山頂近くの鞍部から、北へ回り込み、岩場に架けられた鎖を頼りに、体を迫り上げて、シャクナゲ林のトンネルを抜けると、AM11:45 瑞牆山頂 2230mに見事登頂する。「おめでとう！」登って来た反対側は数百mの大絶壁となっていて、眼下を覗くと身が震えるようだ。



瑞牆山に見事登頂



みずみずしい、シャクナゲの花々



おっと危ない、転がりそうな大岩を、杖と手で支える？



姿を現した瑞牆山二二三〇mの岩峰群

天上のような頂に、30分程憩い、昼食後下山を開始。往路と同じ登山道を、緊張しながら下降する。PM2:00 富士見平小屋に到着。小休止後、軽い足取りで森林帯を下り、PM3:30 登山口に無事到着する。そこから車に再び同乗し、往路と同じ道を引返し、須玉インターから高速を走り、PM6:00 松本へ到着、解散とした。「シャクナゲ林に彩られた金峰山と瑞牆山、その美しさと足元の悪い岩石群の登降を学んだ登山講習だった。

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則

## 2017MHC 登山講習 花の八ヶ岳縦走登山ー赤岳・阿弥陀岳縦走

7月1日 AM6:00、曇天の松本に7名が集合、1台の車に乗り合わせ松本を出発。中央高速道を走り、諏訪南インターからは、山麓道を登り、最終美濃戸に到着。雨本降りとなった登山口で、準備を整えAM8:00出発。鬱蒼とした林道を歩き、水量を増した北沢溪流沿いを進む。登山道脇には、ヤツガタケキシミレ、シロバナヘビイチゴの花々が咲く。2時間半程で赤岳鉱泉に辿り着く。



北沢溪流沿いを進む

シロバナヘビイチゴ



ヤツガタケキシミレ



晴れていれば望む主峰赤岳の威容

この鉱泉の若主人曰く、今年開業以来の土砂降りだという。ここで思案し、地藏尾根の岩稜の登り、さらに赤岳の急峻な尾根の危険を鑑み、40分先の林の中の行者小屋で今日の登山は諦め沈殿する事とする。

ところで参加者の1人が高山病症状を訴え始め、明日の登山を諦めるという。高山病に効く薬を飲ませ、明日の朝の様子で決めることとし、納得させる。

7月2日、風の強い霧雨の朝を迎える。天候の回復は遅れているようだ。参加者の症状は回復し、朝食も摂ることが出来た。本人は登る決心をしたようだ。

AM6:40準備を整え行者小屋を出発。雨が上がったが、風が強く、霧が濃い。地藏尾根の急坂を1歩、1歩と登る。足元には紅色のコイワカガミが咲き競い、我々を慰めてくれる。岩場のクサリ場を這い上ると、強い風が舞う視界の効かない霧の地藏の頭に登り出る。



急坂の地藏尾根を登る

コイワカガミ



イワウメ



岩場のクサリ場を這い上る

稜線を5分ほど登り、赤岳展望荘で小休止、周辺にはウルップソウなどが咲き競い、山頂へ向う稜線に、紫花のオヤマノエンドウ、白花のハクサンイチゲ、イワウメ、チョウノスケソウ、薄紅色のキバナシヤクナゲが風に揺れている。鎖を頼りに、最後の力を出し切るように急峻な岩場を攀り、しばらく稜線を辿ると、PM2:00 三角点の立つ山頂 2899mに見事全員登頂する。「バンザーイ!」。悪条件の中、意外と順調な登りだった。

ウルップソウ



山頂直下の岩場の急坂を登る

チョウノスケソウ

主峰赤岳山頂 2899mに見事登頂



晴れていれば望む、八ヶ岳南部主稜線

握手を交わすと、皆の顔がほころぶ。残念なことに、山頂は濃霧と強風の為、遠望が効かない。20分程で山頂を後にし、もう一つの目標点阿弥陀岳登頂を諦めることとする。鎖を頼りに岩場を慎重に下り、急坂の文三郎道を経て、PM12:00 行者小屋へ。昼食後、赤岳鉱泉を経て、北沢ルートを下り PM3:15 美濃戸山荘到着。その後は昨日と同ルートを復路にして PM5:00 松本へ無事到着、解散とした。

「雨中登山の中、困難を克服した後の登頂の喜びと、岩場に咲く花々のみずみずしさに感動を残す」登山だった。

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則

## 2017MHC 登山講習 夏の槍ヶ岳 報告

7/15 晴れの朝、松本からは7名が1台の車に乗り合わせ、出発。沢渡で待つ2名と合流し、総勢9名となって、2台のタクシーで上高地へ向かう。準備を整え、上高地をAM8:00に出発。鳥のさえずる林道を明神、徳沢と進み、梓川の対岸に前穂の東壁を仰ぎながらPM11:30横尾に到着。ここで昼食を摂る。

横尾からしばらくで登山道となり、一列縦列となって、一ノ俣、二俣の橋を渡り、整備された階段状の登山道を登ると、PM2:30、コマドリさえずる、林中の槍沢ロッジに辿り着く。ロッジに泊す。



河童橋からの梓川、穂高岳の景観



鳥のさえずりを聞きながら林道を進む



前穂東壁を仰ぐ

7/16 曇り空の朝、槍沢ロッジをAM6:30出発。登山道はテント場のババ平を抜け、水俣乗越の分岐を右に見て、見上げると真っ白な雪渓が流れる槍沢の登りにかかる。30分程で雪渓の登りを終え、夏道に出ると、道端に。ナナカマドの白い花、シナノキンバイ、ハクサンイチゲの花々が咲いている。

ジグザグの岩の急坂を登り詰めると、ハイマツ帯が帯状に広がるグリーンバンドに辿り着く。ここで一休み、見上げるといつも望む三角錐形状の槍ヶ岳は流れる雲に隠れ、稜線を覆うように、霧雲が流れ落ちている。坊主岩附近まで登ると、大粒の雨が降り出し、強風が吹きだし、岩道を一步一步登るが飛ばされそうだ。



真白な槍沢雪渓を登る



道端に咲くシナノキンバイ



ジグザグの急坂を登る

近くの殺生小屋に逃げ込み、しばらく様子を見る事にする。この間食事を摂りながら、体力を回復させる、1時間後、勇気を奮起して、今日の宿槍ヶ岳山荘を目指し、急斜面を登り始める事とする。強風に足をすくわれそうになりながらも、M2:40槍ヶ岳肩に辿り着く。濃霧の為、ここからも槍ヶ岳の姿は全く見えない。この日槍ヶ岳登頂を諦め、山荘に沈殿とし、泊する事とする。

7/17、夜半に大雨、強風に悩ませられる。風強く濃霧の朝を迎える。AM6:15全員雨具を着用し、槍ヶ岳穂先を目指して出発。展望は効かず20m先も見えない。見えるのはコースを示すペンキ印だけだ。岩に取り付くと、参加者の恐怖に震える声が聞こえる。



槍穂先に取り付き三点支持で登る



槍絶頂近くを登る



全員登頂「バンザイ！」

足場をしっかり確保し、手指を使って岩を握るように指示する。いわゆる三点支持だ。垂直岩壁に取り付けられた鉄ハンゴを登り、新しく取り付けられたステンレス製の鎖、ボルトを手掛かり、足がかりにして、高度を上げる。AM6:40 強風、濃霧の中、全員見事登頂する。「おめでとう」。

山荘に下山後、熱いコーヒーで祝杯を上げる。



下山し始めると霧が晴れ、天をついて颯爽として聳える槍ヶ岳が、その姿を現した。

AM8:00、山荘の主人穂刈さん、支配人、古い友人に挨拶をして、下山を開始する。岩礫帯や雪渓も無難なく降下し、槍沢ロッジにPM12:00 到着。昼の腹ごしらえをして、PM2:40 横尾、後は林道を遮二無二歩き、PM6:30 上高地で待つタクシー2 台に乗り込み、沢渡でクールダウン体操をして、2 人と別れ、PM8:00 松本で最終解散とした。

「梓川の川辺を辿り歩き、鳥のさえずりに心動かし、槍沢の雪渓を登り、強風と視界ゼロの世界を体験、目指す頂に勇気を奮って登った夏の槍ヶ岳。思い出深い登山講習となったことでしょう。」

登山講習責任者 理事長 鈴木 雅則

2017MHC 登山講習 ー白馬岳大雪渓を登るー

7月29日、早朝、参加者6名が車に乗り合わせ松本を出発。白馬村を抜け、登山口猿倉駐車場に向かう。天候は小雨模様。登山口で準備をしてAM8:00出発。緩やかな登りの林道を小一時間歩く。道端に山アジサイが咲き競う。断続的に雨が降る中、林道が終り階段状の木道、岩礫の登山道を暫らく登ると、白馬大雪渓末端となる白馬尻に到着する。



猿倉から白馬尻へ向かう



ヤマアジサイ  
ミヤマキンポウゲ



末端から望む白馬大雪渓

白馬尻で小休止後、20分ほど登ると、雪渓末端に着き、軽アイゼンなどを装着する。吹き降ろす冷風に注意して、一步、一步固い雪渓に足場を確認しながら登る。見上げる上空からは本格的な雨が降り注ぐ。雪渓上には、頭ほどの大きさの落石が散乱している。2時間半かけて、ようやく雪渓を登り切り、ガラ場を詰めて、小雪渓へ向かう夏道の斜面をジグザグに登る。途中小雪渓から流れ落ちる溪流脇で、疲れた足を休ませながら昼食を摂る。



白馬大雪渓を登る



クルマユリ



オダマキシソウ



ハクサンフウロ

昼食後、急斜面の小雪渓を横切り、クルマユリ、シナノキンバイなど、花々の咲く葱平を過ぎると、霧の中に、稜線近くに建つ頂上宿舎の建物が見えてくる。登山道脇には、ミヤマキンポウゲが咲き、ハクサンイチゲの大群落が広がっている。稜線に出ても、濃霧の為視界が効かない。西からの雨風に吹かれながら、ウルップソウなどの花々の咲く稜線を登る。PM4:50白馬山荘に到着、泊す。



下山時に、姿を現した白馬岳山頂



濃霧の中、山頂へ向かう



白馬岳山頂 2932mに見事登頂

翌7月30日、濃霧の朝を迎える。朝食後、山頂へ向う。南方向に杓子岳 2812m、白馬鑓ヶ岳 2903mが展望できるはずだが、濃霧の為、全く見えない。20分程登ると、AM6:45 石の道標が建つ白馬岳山頂 2932mへ全員登頂する。「おめでとう！」

しばらくするとわずかに霧が晴れ、山頂から、東側の絶壁を、恐る恐る覗き込む。遙か眼下に、登ってきた白馬大雪渓が望まれる。北東方向眼下には、白馬大池の池面が、きらきらと小さく輝いている。



白馬大雪渓を、蟻の行列のように繋がって登る登山者たち



チシマギキョウ



ヨツバシオガマ



ウルップソウ

AM8:00 過ぎ、白馬山荘から下山開始。杓子岳への縦走路との分岐点まで降りてくると、霧が流れ、白馬岳山頂がその切っ先の頂の姿を現した。白馬岳へ名残欲しい想いを胸に私達は往路と同じルートを降りていく。花々の咲く葱平を通過し、真っ白な大雪渓を転ばぬよう注意して下っていく。PM12:00 白馬尻到着。ここで暖かい昼食を摂り、PM2:00 猿倉登山口に到着する。猿倉駐車場からは、一台の車に同乗し帰途に就く。PM4:20 松本で解散とした

「憧れの白馬岳の大雪渓を登り、白馬に咲く花々に心動かされた、ちょっと辛い白馬岳登山だった。」

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則

## 2017MHC 登山講習

## 穂高岳連峰縦走登山

8月11日 AM6:00 曇り空の松本。集合した参加者11名は2台の車に乗り合わせ松本を出発。AM7:00 沢渡で待つ1名を加え、総勢12名となって、タクシーで上高地へ向かう。天候は晴れ。新釜トンネルを抜け道路を巡ると、流れる雲間に穂高岳が高く聳えている。上高地で準備を整え AM8:00 出発する。明神、徳沢と梓川左岸沿いの林道を行く。AM11:15 横尾に到着する。



河童橋袂で記念撮影

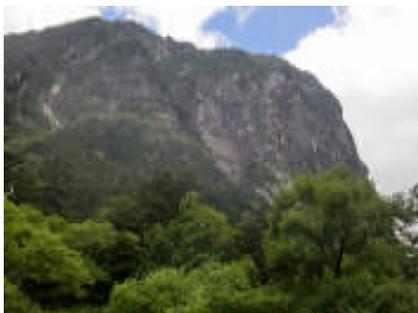


梓川左岸沿いの林道を行く



ホタルブクロ

横尾で昼食後 AM11:45 出発。上空に雲が湧く河原を30分程歩き、林中の左手に豪快な屏風岩を仰ぎながら。PM1:00、沢が合流する本谷に到着。小休止後、急坂の岩道を1時間も登ると低木帯が広がり、見上げると涸沢のテント場とヒュッテの赤い屋根が望まれ、その後方に穂高岳の峰々が迫ってくる。PM4:00 涸沢ヒュッテに到着、泊する。夕食前、参加者展望テラスに陣取り、明日の登攀を案じながらひと時を楽しむ。



豪快な屏風岩を仰ぐ



涸沢カールをを一步、一步登る



北穂高岳を仰ぐテント場

8月12日曇り空の夜明け。AM6:45 準備をして、北穂高岳山頂を目指し涸沢ヒュッテを出発。10分程登った涸沢小屋裏からは、いきなり急坂のガラ場を直登し、岩礫帯の枯れた草地をジギザグに1時間程登る。草地を抜けて高さ60m程の岩壁に取り付けられた鎖を頼りに登り切ると、さらに急峻な岩稜線が1時間程続く。

尾根上の北穂テント場を通り抜け、穂高岳主稜線の岩場に登り出て、北へトラバース気味に辿ると AM11:00 北穂高岳山頂 3106mに到達する。「バンザーイ！」全員笑顔で握手を交わし合う。山頂は濃霧に覆われ、視界が効かない。北穂高小屋のテラスで早めの昼食を摂る。



急峻な岩稜線を登る



濃霧の中、槍ヶ岳が姿を現し始める



北穂高山頂 3106mに登頂する

AM11:45 北穂高小屋を出発。北穂高岳からは急峻な岩尾根を進む。この頃から霧が舞う稜線。稜線西側の眼下を覗けば、「鳥も通わぬ滝谷」といわれる高度差 1000mの大障壁が落ち込んでいる。最低鞍部からは、落石に注意して絶壁を攀じり、涸沢槍を経て涸沢岳への最後の難関に挑む。



主稜線の急峻な岩尾根、左側は滝谷 涸沢岳への絶壁を降下する参加者 涸沢岳 3110m山頂に全員登頂

しばらくの登攀の後、岩溝のクサリを頼りに、満杯の力を使って体を迫り上げると、涸沢岳山頂へ続くなだらかな稜線に登り出る。PM2:00 涸沢岳山頂 3110mに全員登頂する。「おめでとう!」。皆、難関を乗り越えた安堵の笑顔が見れる。PM3:30 穂高山荘に到着、泊する。一息ついた頃、各人、今日の登攀の思いを胸に祝杯の美酒に酔う。

8月13日 東の雲海を橙色に染めて朝陽が昇る。AM6:30 準備を整え、奥穂高山荘を出発。いきなりの 50m 程の絶壁を攀じるとなだらかな登りの岩礫帯のジグザグ路を行く。稜線を進むと、道標と祠が見えてきた。AM8:00、北ア最高峰奥穂高岳 3190mに全員登頂する。山頂からは 360° の大展望。南にジャンダルムの大岩峰、霞沢岳の谷間に蛇行して流れる梓川、その彼方に焼岳、乗鞍岳、御嶽山が雲間に見え隠れしている。北方には、命がけて歩いてきた穂高の峰々の展望が広がる。私達は、熱い感慨を胸に眺望する。



奥穂高岳からの展望、歩いてきた穂高岳縦走路を振り返る

AM8:15 吊尾根の岩稜線をトラバース気味に前穂高岳へ向かう。岩陰にヨツバシオガマ、ウサギギク等の高山花が咲く岩稜線を注意しながら進む。途中、リーダーの鈴木理事長が、路を間違えた登山者に注意をしたり、参加者にも後方をむきながら指導中、足を滑らし転落。岩に顔面、腰、膝を強打してしまいました。応急処置の後、岩場の登攀に注意して進む。AM11:00 ようやく紀美子平に到着。

ここに荷を置き、軽荷で前穂山頂に向かう予定だったが、ここまでの登攀に時間を費やしてしまい、下山の時間を思案し、ここから 1000m 下の岳沢に向かって直ちに下山を開始する。



涸沢槍、先鋒に到達



ジャンダルムの威容



奥穂高岳に全員登頂



ブロッケン現象



吊り尾根の縦走路に行く



穂高に生息する雷鳥

いきなりの滑りやすい岩稜の急斜面も、鎖を頼りに、慎重に下降。途中昼食を摂り、腹ごしらえをして、PM2:30 岳沢ヒュッテへ到着。ここで小休止して森林帯の緩やかな下山路を下る。PM 5:20 上高地の登山口へ到着。「おめでとう！」登山道から林道に出て、皆ほっと安堵の笑顔を交わす。



岳沢を下山し、上高地の登山口へ到着「おめでとう！」

観光客でごった返す河童橋付近を通過し、混雑の中、全員タクシーに乗り込み、PM6:30 上高地を後にする。PM6:30 沢渡駐車場に到着。車に乗り合わせ、帰路を急ぐ。PM 8:00 松本で最終解散としました。

「岳人憧れの難ルートに挑戦した参加者皆様の勇気と情熱に敬意を表すると共に、皆様にとって、これからの登山人生に、大きな自信となる。」事でしょう

MHC 登山講習責任者 MHC 理事長 鈴木雅則